



企画展 こばやしきよちか

# 「明治の名所絵師 小林清親展」

小林清親（1847～1915）は弘化4年（1847）御蔵屋敷の旗本の家に生まれ、文久2年に家督を継ぎ順風満帆の暮らしをしていましたが、幕末の動乱に巻き込まれ、全てを失います。明治政府が樹立すると西洋から様々な文明、文化が流入します。清親はいままでの暮らしが大きく変わる光景を目の当たりにします。鉄道、馬車、ガス灯、写真や西洋式的生活習慣など文明開化と呼ばれる近代化の時期に入り、江戸の景色が徐々に失われてゆきました。清親は浮世絵師として再出発し、文明開化を代表するレンガ造りの建物や機関車、蒸気船や消えゆく江戸の面影の風俗、風習などをテーマとした作品を発表し瞬く間に人気絵師の仲間入りをします。



「東京橋場渡黄昏景」  
制作：明治9年 版元：松本平吉

承和2年（835）太政官符に記録されている隅田川の渡しの中で最も古い渡しで、京と武蔵国と常陸国府を結んでいました。江戸時代は近くにあった白鬚神社からとった白鬚の渡ししらしげの名前が一般化しました。この作品は清親の初期の作品で明治9年に「光線画」と銘打って刊行した中のひとつです。図は隅田川を東岸から西岸に向かう渡舟で、乗っているのは女性2名、男性2名と櫓を漕ぐ舟頭です。夕日を浴びて対岸の森や川面を行く渡舟の舟頭の着物や顔が燃えるような赤い色彩に輝いています。



「明治十四年一月二六日出火 浜町より両国大火」  
制作：明治14年 版元：福田熊次郎

清親は、火事が大好きだったようです。火事の声を聞くと着の身着のままスケッチ帳を片手に外に出て行き火災の現場をスケッチしていました。図は、明治時代最大の火災通称「神田松枝町大火」といい、日本橋、神田で燃え上がる炎が隅田川を越えて対岸の本所、深川に燃え広がる場面を描いています。この火災が鎮火し、清親が自宅に戻った時には自分の家も焼失し、生活道具の他スケッチ類や絵具なども失ってしまったそうです。

那珂川町馬頭広重美術館 学芸員 市川 信也

2月初旬にミニギャラリーに届いた作品をご紹介します。

連風（カタクリ山公園）に書いてある文字は「わが里は良い水、良い米、良い温泉とカタクリ、水芭蕉の群生がある那珂川町」だそうです。

たこ作り、たこあげを希望する方は薄井さんまで。

☎ 0287 - 96 - 3133

マンサク（カタクリ山公園）  
青木信夫さん（小川）



ミニ  
ギャラリー



連風 薄井昭二さん（小川）